「建学の精神」に関する大学間連携による共同実践研究（第三報）
― 新型コロナ禍時代およびその後を見据えたキリスト教的人間観の視点から ―

別府悦子・中島賢介・高木総平
矢澤励太・楠本史郎

Collaborative Research on the “Founding Spirit” through Cooperation among Universities (3rd Report)
― A Christian Perspective on Humanity in the Era of the Covid-19 Disaster and Beyond ―

Etsuko BEPPU, Kensuke NAKAJIMA, Sohei TAKAKI,
Reita YAZAWA, and Shiro KUSUMOTO

研究紀要　第23号　別刷（2022年３月）
中部学院大学・中部学院大学短期大学部

Reprinted from THE JOURNAL of
CHUBU GAKUIN UNIVERSITY, CHUBU GAKUIN COLLEGE
No.23 : 23－34（March 2022）
SEKI, GIFU, JAPAN

中部学院大学・中部学院大学短期大学部　研究紀要第23号（2022）23－34

研究論文

「建学の精神」に関する大学間連携による共同実践研究（第三報）
― 新型コロナ禍時代およびその後を見据えたキリスト教的人間観の視点から ―

Collaborative Research on the “Founding Spirit” through Cooperation among Universities (3rd Report)
― A Christian Perspective on Humanity in the Era of the Covid-19 Disaster and Beyond ―

別府悦子[1)]・中島賢介[2)]・高木総平[3)]
矢澤励太[4)]・楠本史郎[2)]
Etsuko BEPPU, Kensuke NAKAJIMA, Sohei TAKAKI,
Reita YAZAWA, and Shiro KUSUMOTO,

抄録：本研究は、北陸学院大学・同短期大学部と中部学院大学・同短期大学部間の連携協定に基づき、継続して行ってきた共同研究の一環である。ここでは、両大学の建学の精神の歴史的経過と位置づけを振り返った上で、新型コロナ・ウィルス感染症による影響や実態をふまえながら、チャペル活動やキリスト教的人間観を基盤においた教育実践活動について検討した。その結果、建学の精神が両校を支えてきた歴史があるとともに、その底流にある、一人ひとりをかけがえのない存在として尊重し理解するうえで、神の前に謙虚であるというキリスト教的人間観が土台であり、その具現化およびその展開がますます必要であると示唆された。

キーワード：新型コロナ禍、建学の精神、キリスト教主義教育、キリスト教的人間観

序章

新型コロナ・ウイルス感染症（COVID-19）をめぐる問題が、この数年世界中を席巻し、現在もその状況が継続している。高等教育機関においても大きな影響があり、学生たちの学習や生活上の不安・困難が増大し教職員もその対応に追われている。一方で、少子化の進行による18歳人口の減少やめまぐるしく変化する大学教育政策等によって、高等教育機関は大きな岐路に立たされている。ことに、私学においては存続の危機や入学生の多様化への対応など、多くの課題を抱えている。

ところで、大学審議会は、平成10（1998）年に「21世紀の大学像と今後の改革方策について：競争的環境の中で個性が輝く大学（答申）」を提示した。そこで強調されたのが、「個性化」「機能別分化」「質保障」である。中でも私学の役割として、「個性化」において、建学の精神は各大学の個性の基盤をなすものとして改めて重視されている。中島（2019）は、私立学校が改革を迫られる時、必ずと言ってよいほど「立ち返る」ものとして挙げられるのは建学の精神であることを過去の文献検索調査研究の中で明らかにしている。そして、建学の精神が単に崇高な理念として掲げられるのでなく、具体化かつ明確化していくためには、これが大学におけるすべての教育に貫かれている原理原則としてとらえ、「実践されているもの」として捉えることの必要性をあげている。その際、一大学、一教員が建学の精神の具現化を図るだけでなく、他大学と協働することでそれぞれの具現化に対する課題を明確にすることも重要であるとする。

北陸学院大学・同短期大学部（以下北陸学院と記す）と中部学院大学・同短期大学部（以下中部学院と記す）は2017年９月に締結された連携協定に基づき、この４年にわたって次の共同研究を実施してきた。一つは、チャペル活動をはじめとした宗教活動を通し、学生育成の充実を図るための共同研究である（高木他、2018）。もう一つは、多様性を尊重したインクルーシブ保育・教育についての共同実践研究である（別府他、2020・平野他、2020・ダーリンプル他、2020）。さらに、2020年度は、チャペル活動や教育活動、それらを評価する「PROG」テストの中の取り組みや実践事例を通して具現化の実態を明らかにした（別府他、2021）。このような複数の大

１）教育学部子ども教育学科　２）北陸学院大学人間総合学部子ども教育学科　３）人間福祉学部人間福祉学科
４）北陸学院大学人間総合学部社会学科

学が連携して共同研究を行うことで、それぞれの活動を振り返り、建学の精神の具現化の到達点と課題をより可視化していくことができると考える。

本稿は４年間の共同研究の成果をもとに、改めて両校の建学の精神が拠って立ってきた経緯や理念を振り返るとともに、新たに生じた新型コロナ禍の問題に鑑み、学生支援や宗教活動等を検討し、新型コロナ禍時代およびその後を見据え、建学の精神の具現化の視点を得ることを目的とする。

両校の建学の精神の礎はキリスト教主義教育であるが、この共同研究の中で楠本は、「キリスト教教育の目的は『多様性を担保するもの』である」と述べている（高木他、2018）。現在、高等教育機関の中では多様でさまざまな事情を抱えた学生が在籍していることが全国的に報告され、その対応が進められている。障害者権利条約の批准を受けて「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」が施行されたのは、2016年であるが、そこでは、大学等において、合理的配慮が行われることが義務化（私学は努力義務）され、多様性を尊重することの意味が明記されている。つまり、キリスト教主義教育を礎に両校の建学の精神が掲げている、一人一人をかけがえのない存在として尊重するという、教育の根本的な問いが、我々に突き付けられてきているとも言える。その際、インクルーシブ社会において、一人一人の人間理解を深めることが重要であることを共同研究の中で明らかにしてきた。今回、こうした教育の在り方を経緯も含めて立ち返り、両校の教育や研究のさらなる向上と地域における社会的任務を遂行していくための一助とすることが本研究の意義である。本研究の目的は次の３点である。

① 両校の建学の精神が拠って立ってきた理念と経過を振り返り、この時代における意義を再確認する。
② 新型コロナ禍下におけるキリスト教や教育の活動を検討し、実態と課題について考察する。
③ ①②をもとに、両校のキリスト教教育と実践における建学の精神の役割と人間理解の視点を考察する。

第１章　両校の建学の精神の振り返りとこの時代における位置づけ

（１）北陸学院大学・同短期大学部の建学の精神が拠って立つもの

１．建学の精神

北陸学院は1885（明治18）年の金沢女学校創立以来、詩編111編10節の「主を畏れることは知恵の初め」“The fear of the Lord is the beginning of wisdom.”を建学の精神としてきた。これは、創立者の米国北長老教会宣教師メリー・ヘッセルが愛した聖句である[1)]。

「主を畏れる」ことについては、次のように理解されている。

① 神の前で人間が自らの罪と不完全さを認識し、学問と人に対しても謙遜となることが求められる。これはとくに、「ただ神の栄光のために」（１コリント10:31）を強調する改革長老教会の信仰的伝統に拠る。
② 神以外の何ものも恐れず、真理を主体的に探究する学びの意欲、姿勢を表す。その志が、1885年９月９日の金沢女学校開校式でのヘッセルの式辞に示されている[2)]。
③ 学びをとおして、神と、神に愛される人々や地域に仕える使命を自覚することが求められる。これは、宣教師として召され、北陸地方の女子教育に生涯をささげたヘッセルの生き方そのものでもあった[3)]。

しかしこうしたキリスト教信仰は、当初、学則には直接反映されなかった。金沢女学校学則第一条「生徒教養ノ目的」では「道徳ヲ本トシ普通学ヲ授ケ善良有益ナル女子ヲ養成スルヲ目的トス」とある[4)]。

1890年に「教育ニ関スル勅語」が発表され、天皇を頂点とする国家体制を目指す国の教育方針が明らかになる。1899年には「私立学校令」および「文部省訓令第十二号」が発せられ、公認学校で宗教儀式が禁止される。キリスト教学校は存立の危機に立たされた。その時、金沢女学校は公認学校の地位を捨て、建学の精神を守り、礼拝や聖書の授業を続ける決意をする。1900年には校名も北陸女学校へ変更する。その新学則第一条「教育ノ目的」は「本校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ授クル所トス」であった[5)]。

しかし「道徳ヲ本トシ」という金沢女学校学則の言葉は、「主を畏れることは知恵の初め」という精神を内包しており、同校では道徳の授業で旧新約聖書が教科書として用いられた。この姿勢は北陸女学校にも受け継がれた。建学の精神は脈々と息づいていた。

1937年、当時の中澤正七校長の方針により、北陸女学校は財団法人となる。寄附行為を定めて理事会を組織し、基本金を設定した。米国長老教会の経営から離れ、いわゆるミッションスクールを脱する。この時、寄附行為第一条を「本法ハ教育ニ関スル勅語ノ御趣旨ニ基キ基督教ノ主義ニ拠リ女子ニ教育ヲ施スヲ以テ目的トス」と定めた。初めてキリスト教教育を明記し、建学の精神を明らかにした[6)]。これにより、日中・太平洋戦争下の困難な時代にも、学校礼拝を毎日守り続けることになる。

２．建学の精神の展開

第二次大戦敗戦後、財団法人北陸女学校は学校法人北陸学院となり、新制中学・高校、幼稚園を擁した。1950年には保育短期大学を、1953年に北陸栄養専門学院を設立、これらは1963年に北陸学院短期大学となり、英語科、教養科、やがて人間福祉学科が加わる。さらに2008年に北陸学院大学および北陸学院大学短期大学部となる。1961年には北陸学院小学校を設立し、1886年に設立され

たが1903年に廃校となった英和小学校の再興とした。

敗戦から半世紀を経て、園児・児童・生徒・学生数が増えるとともに、北陸学院に入学して初めて聖書に触れる者が大半となる。教職員も非キリスト者が多数となる。このなかで建学の精神をどう守り、展開していくかが問われた。そこで2005年の創立125周年を迎えるに当たり、学院の標語が、続いて教育理想が作成され、理事会で承認された。

1）学院の標語（スクールモットー）「あなたの使命を実現しよう」Realize your mission

創立120周年に当たり、21世紀の北陸学院の教育を一般に分かりやすく表現するため、博報堂に依頼し、標語とロゴ、歌を作成した。本学院は戦前より市民から「ミッション」と呼ばれ、親しまれてきた。そのイメージをもとに、神から与えられた使命を自覚し、学びを通じて自身を磨き、使命を実現することを訴え、生徒・学生募集にも用いられた。

2）学院の教育理想　the Mission statements

上記標語をもとに、北陸学院のキリスト教教育の理想・目標を表明した[7]。

①「神を畏れ、国を想い、人を愛する。We believe in God, appreciate our country, and love our neighbors.」

詩編111編10節の建学の精神を具体化したものである。神を知ることは、神によって生まれた歴史と文化を理解し、責任を自覚し、課題を負いつつ、隣人を愛することを意味する。

②「生かされている自分を活かす。We seek to use our God given gifts and talents.」

それぞれが神の恵みを受け、賜物を与えられている。感謝してこれに応答し、学びを通じて賜物を発展させ、活かしていく。これが北陸学院の教育における自己開発である。

③「アタマをきたえ、カラダをつよくし、ココロをみがく。We seek to develop our mind, body and spirit.」

精神と身体は分離されえない。学校生活で知力を養い、身体を鍛錬していく。同時に人格の内奥にある魂が霊的に深められてこそ、真の成長へと至る（1テサロニケ5：23）。

建学の精神に基づき、標語と教育理想を掲げることにより、北陸学院のキリスト教教育の基本的方向を示した。現在に至るまで、事務局を含む各校で毎日礼拝が守られている。

3．建学の精神の具体化の試みと課題

1）具体化の試み

2008年の北陸学院大学開学後、本学の特徴であるキリスト教教育を進めるため、2020年に“Mission Standard 2030”が、また第3次中期事業計画（2020～2024年度）が策定された。

（1）“Mission Standard 2030”

OECDの“Education 2030”を意識しつつ、幼稚園から大学までの北陸学院全体のキリスト教継続教育が何を目指し、実践するかを指針にまとめた。人格 Personality を形成する知 Mind、力 Talent、心と体 Heart & Body を育成する。SDGs を含め、時代が求める「誰も取り残されない世界」の実現を求め、世界の抱える諸課題を真剣に担う人格の育成を目指す。大学・短期大学部は、その最終段階を担う。

（2）北陸学院第3次中期事業計画（2020～2024年度）[8]

第3次中期事業計画は、北陸学院の教育内容を革新し、確立することを目指す。5つの大目標を立て、その実現のために各部局で毎年度の事業計画を立案、実施、検証している。その第1目標が「キリスト教精神の浸透」である。これについて大学・短期大学部の2021年度事業計画は、「学生及び教職員にキリスト教的人間観の理解と浸透を図るために、礼拝が基礎であり中心である大学として、その内容の充実を図る」を掲げた。

さらに「（1）キリスト教学校として、礼拝が教育の基礎であり中心であることを、学生・教職員が共通に認識する取り組みを具体的に進める」とし、

① コロナ禍でも礼拝を継続し、動画礼拝の質の向上、学生の礼拝出席向上に努める。
② キリスト教学校としての本学の教職員の理解の向上を図るため、建学の精神に関わる研修会、礼拝出席可能日調査、教授会での礼拝出席の呼びかけを行う。
③ 2020年度に採用した『聖書　聖書協会共同訳』の理解を広げるため、学生には新訳の特徴を生かした礼拝を、教職員には新訳について解説する「聖書を学ぶ会」を行う。

（2）には、「本大学の学びの emotional な基礎であるキリスト教的人間観に立った上で的確な実践能力 competency を育てる[9]。学生一人ひとりの自己肯定感を培い、学ぶ意欲と使命の自覚へとつなげる」を掲げ、

① 毎年、全1年生が参加する一泊セミナーに、シニア・リーダーを養成し参加させる、秋の大学の一泊セミナーを1、2年生合同で行う、としている。

（3）では、「北陸学院スタンダード[10]におけるキリスト教教育の集大成として、大学の役割を確立する」とし、

① キリスト教的人間観の理解・浸透を図る。
② 教職員と面談を行い、キリスト教的人間観の観点から、本学における各学科の学びを位置付ける。地域諸教会礼拝への出席を勧める、としている。

事業計画は、各項目について担当部署、数値目標、スケジュールを決め、年度末に検証し、達成度、課題などを付記して理事会に報告する。こうしてキリスト教学校である本学の特徴を明らかにし、建学の精神を現代のキリスト教教育に具体化しようとしている。

２）課題

建学の精神を現代に継承し、発展させて北陸学院の教育の特徴を明示するためには、多くの課題がある。以下に諸課題を列挙する。

（1）キリスト教的人間観に対する学生の理解を深め、自己肯定感を養い、学ぶ意欲へとつなげる。

（2）非キリスト者教職員のキリスト教教育理解を進め、それぞれの役割を明らかにして、キリスト者教職員との協働体制を確立する。

（3）建学の精神に基づいて、学生の学びの成長を可視化し、促すアセスメント・ポリシーを確立し、DP、AP、CP を絶えず見直す仕組みを作る。

（4）建学の精神に基づき、礼拝、セミナー、行事を含むキリスト教関連科目と、一般科目との関係を明らかにし、それぞれの位置付けを明確にする。

（5）新型コロナ・ウィルス感染、その他どんな状況下でも、大学礼拝が本学の基礎であることを学生・教職員が共有し、礼拝をさまざまな手段で継続し、学生・教職員の参加を促す。

（２）中部学院大学・同短期大学部の建学の精神が拠って立つもの

１．建学の精神に関わる創設者、それを引き継ぐ人たちの願い

中部学院大学・同短期大学部の母体となる学校法人岐阜済美学院は、「岐阜裁縫塾」として、1918年に片桐龍子より、女性の自立のための教育を目的に開設されたことがその始まりである。そして、片桐龍子の後継者である片桐孝の意思で第二次世界大戦終戦直後、キリスト教主義学校となった経過がある。それが、現在の学院長である片桐多恵子に引き継がれている。「神を畏れるものは知識のはじめである」と旧約聖書「箴言」１章７節に基づいた建学の精神を定めたのは片桐孝であった。建学の精神に関わる解説や沿革については、すでに第１報、第２報で高木ら（高木他、2018・別府他、2021）が述べているところであるが、ここでは創設者、そしてそれを引き継ぐ者たちの思いについて、述べていきたい。

創設者の片桐龍子は、「女子教育の向上こそが日本国の発展の礎である」という信念をもって学校の開設を行った。その理念的ベースは幼い時から両親から受け継いだ国家神道の信仰であり、「温良・貞淑・質素・勤勉」が校訓として制定されていた。しかし、本格的な学校運営が行われていた時期に、夫の竜三郎が死去し、経営危機、世界大戦、校舎の失火、など様々な苦難が襲いかかる。その後、今日の学院の発展につながる、決定的な出来事があった。それは、長男登喜夫と孝との結婚であった。そうして財団法人岐阜済美学園が設置認可され、その学園の理事長に登喜夫が就くことになる。ところが、設置認可の翌年の1945年に登喜夫が病死してしまったのである。また、終戦により、国家神道が否定され、片桐龍子自身も公職追放の対象になり、学園運営から身を引かざるを得なくなってしまった。

そこで、嫁である片桐孝が学園の運営を担うことになった。孝は、キリスト者であり、新たな教育の在り方、これからの学園運営の方向について熟慮した結果、「これからの教育はキリスト教による他はない」と自ら信仰するキリスト教主義に拠って立つことになった。時代が大きく転換したとはいえ、キリスト教主義教育への無理解や制約もあり、苦難は続いた。「創設者片桐龍子が公職追放を受け、（略）公私ともに苦しい日々が続いた後に、私が学校運営の責任をもつことになり、キリスト教主義の学校として旗色を鮮明にした。私学存続の可否が危ぶまれる時に仏教県岐阜においてキリスト教主義を標榜することは非常に危険である」（片桐、1966）と指摘もあったとし、その苦難の大きさは想像に難くない。しかし、それを支持したのは創設者龍子であった。人間平等・世界平和を願う信念が龍子にあり、信仰は違ってもそれを受け止める包容の大きさゆえ、キリスト教主義教育の学校にしようとした決断を支持したのであった。

戦後、キリスト教主義学校となってからは、旧約聖書の箴言から建学の聖句が採られることになった。これが現在の建学の精神である。

「神を畏れる」、その意味するところは、その存在を「うやまい」「あがめる」ことであり、「絶対」なるものへの信仰である。故に信仰の基盤があってこそ、初めて人間としての存在を識り、生き方を得る（和木、2000）。そして、隣人愛に生きることは、その後の短期大学、大学、大学院等の根底に流れる理念として引き継がれることになる。

孝の長女である片桐多恵子（現短期大学部学長、学院長）の夫、片桐武司（現理事長）は建学の精神の具現化にふれ、「21世紀は福祉の世紀と言われています。福祉とは幸福ということであり、人間が人間らしく生きることです。社会的に弱い立場にある人たちも等しく人間として人間らしく生きる権利があります。それを実現するのが福祉社会です。福祉の根底は隣人愛の精神であり建学の精神と合致するため、学院のすべての教育活動の中に、建学の精神を具現化させたい」という思いを述べており、「福祉の済美」「福祉の中部」として、地域から評価を受けることへと引き継がれていく。

福祉は、謙虚な心と豊かな心情を持つ者でないと従事できない。小さき弱き人たちの痛みを知り、愛情を注ぐ思いやり、それは「神を畏れる」ことから生まれるのである（和木、2000）。建学の精神にはそうした人間の生き方の根源なものを追究する姿勢が示されている。元教授の窪田暁子は、「助けを求めている人々の現状を見れば、私のようなものでも何かができるかもしれない、と思い始めている。そのような私に向かって、この大学の建学の精神は語りかける」として福祉関係者にとって、建学の精神は大きな意義のある言葉であるとする。

岐阜済美学院は、戦後180度の転換があったかのように思われるが、標榜する語句は違っても、建学の「志」は不易である。変わらず貫かれているものは、信仰による「こころの教育」であり、人間を超えた大きな存在への認識と感謝に根ざす人間理解である（和木、2000）。こうした片桐龍子から引き継がれ、拠って立つ理念が教育の根幹に流れているといえる。

2．建学の精神の展開

前述したように片桐龍子が女子教育の向上という信念をもって岐阜裁縫塾を開設し、その７年後の1925年に岐阜実科高等女学校を設置し、財団法人岐阜済美学園としての設置認可は1944年に行われた。そして、1947年に岐阜済美女子商業学校が開設された（1948年に済美女子高等学校、2004年に済美高等学校と校名変更）。片桐孝の代になり、キリスト教学校教育同盟に加盟したのが1947年である。こうした高等学校を母体に、1951年に学校法人岐阜済美学院の設置が許可され、1967年に岐阜済美学院短期大学の設置に至る。その後、1970年に中部女子短期大学に改称し、現在においても長らく地域において、福祉や保育などの人材を輩出している。附属幼稚園（1973年）、桐が丘幼稚園（1980年）も開設され、幼児教育の充実がさらに図られた。

短期大学を基盤に大学の設置が行われたのが1997年である。大学は人間福祉（Human well-being）を標榜して、全国初の人間福祉学部・人間福祉学科が誕生した。その後、人間福祉学部に健康福祉学科設置（2014年３月まで）、2001年に大学院が設置され、人間福祉学研究科・人間福祉学専攻（博士課程後期）を擁することになる。また、2003年には人間福祉学科に通信教育課程を設置する。2006年には、各務原キャンパスが開設され、２つのキャンパスにおいて、人間福祉学部・子ども福祉学科（2011年６月まで）および経営学部・経営情報学科（2020年２月まで）を置き、2007年に子ども学部・子ども学科、リハビリテーション学部・理学療法学科設置、2014年にリハビリテーション学部を看護リハビリテーション学部に改称し、看護リハビリテーション学部・看護学科を設置した。さらに、2015年に子ども学部・子ども学科を教育学部・子ども教育学科に改称し、2017年にスポーツ健康科学部・スポーツ健康科学科を設置している。

幾多の変遷を経て、現在、大学院、４学部５学科ならびに通信教育部、留学生別科を擁する大学、２学科を擁する大学短期大学部、済美高等学校、附属幼稚園、桐ヶ丘幼稚園、社会福祉法人常盤保育園を併設する総合学院となった。

岐阜済美学院は、裁縫教育に始まり、戦後は社会の要請に応じて、商業、保育、看護、福祉分野の人材育成を行ってきた。そこには、学院創立者の意思－女子教育、とくに実務教育による女子の自立への願い－が生かされているだけでなく、さらにそれを発展させて男女参画社会の教育を意図しつつ、愛と奉仕を教育の基本としていた。その根底に建学の精神があったといえよう。

大学初代学長の岡本健は、非キリスト者であったが、建学の精神と福祉が根幹であるとし、雨宮栄一宗教総主事と今村允男学院長らとともに、この建学の精神を具現化するために、礼拝の場所に片桐孝の名前をあえて掲げることで具現化を試みた。そして、それは後にも引き継がれ、礼拝や教育活動の礎となっている。

3．建学の精神と人間理解－ Under Stand －

「神を畏れる」とは、「神を敬う」こと、「知識」とは「知恵や賢さ」のことを指す。つまり、「神を畏れることは知識のはじめである」とは「大きな知恵と愛の存在である神を敬うことが、学びの第一歩である」と言うことである。旧約聖書から出典しているが、聖書は続けてこう述べている。「無知な者は知恵をも諭しをも侮る」。つまり、愚かな者は人を尊敬しないし、助言に耳を傾けない。だから、愚かなままなのだと。一方で素直に自分を低くすると、理解する力が高まるのである。

片桐多恵子は、この建学の精神が人間理解の根底に流れる理念だと捉えている。【理解する】とは、英語のUnderstand の意味しているとおりである。Under Stand－相手よりもへりくだり、謙虚な心になること－それによって物事や人の心がよりわかってくると教えてくれている。日本のことわざ、「実るほど、頭を垂れる稲穂かな」も同じことを言っている。お米の稲穂は、穂の中が実る程に頭（あたま）を垂れる。頭（こうべ）を垂れるのである。これらのことわざや Under stand の意味することを忘れずに、素直に謙遜な心で、大きな知恵ある存在を仰ぎつつ、学生には一生懸命に学んでほしいと願っている。誰もがこの世で果たす使命があってこの世に生まれてきた。その使命を果たすために一生懸命学び、そして、このコロナ禍の大変な時代にも、一生懸命に生きてほしいと願っている。

第２章　コロナ禍における北陸学院大学の取り組みと今後の課題

（1）「建学の精神」に関する教育実践報告－パンデミック下にあるキリスト教学校の共同体形成

新型コロナ・ウイルス感染拡大が教育活動にあたり教員の中に不安を引き起こした時、礼拝について出てきた意見は、当面の間礼拝を休止してはどうかというものであった。資格取得にも関わり、学生の現在と将来に直結している授業は保証されなければならないが、礼拝は緊急事態にあっては割愛されてもやむを得ないという理解がそこには垣間見える。そうした時に、礼拝が本学のすべての教育研究活動の土台であり中核であるという基本理解が、単なるスローガンではなく、本当に教育研究共同体の構成員ひとり一人の中で確信となっているのかが

問われるし、その本質が現れ出ることになる。それゆえに今回の危機にあたって本学ではまず、キリスト教教育活動全般を司る大学キリスト教センターにおいて、センターの位置と役割を確認し、本学の教育研究活動における礼拝の不可欠な位置づけを確認するところからその取り組みを始めた。

危機の時にあたっては礼拝休止もやむを得ずという意見が早い段階で出て来るということは、礼拝は授業と異なり、緊急時には割愛できるオプションに過ぎないという意識が働いているということである。礼拝がなくても授業を中心とする本学の教育活動は成立するという前提理解がそこにはある。ここにおいてこそ、本学がキリスト教主義大学であり、礼拝がその教育研究活動の土台であり、中核であると普段言われていることの真価が問われるのである。問われるべきは「礼拝をするかしないか、礼拝を行うか中止とするか」、という問いではなく、本学が授業を再開する限り、大学礼拝は行うということを再確認するところから本学のパンデミック対応を始めたのである。取り組むべき問いは、「礼拝実施の是非」ではなく、「どうしたら今の状況下で本学のいのちである礼拝を継続できるか、そのために何が必要か、どんな工夫ができるか」という問いであり、「現在の感染症に対する対策をいかに取り、いかにリスクを抑えた仕方で礼拝を実施することができるか」を巡る問いである。

その場合、本学ではコロナ禍以前から礼拝を、授業としてもきちんと位置づけていたことが、対応の方針を定める上でも有効であった。本学において礼拝は１年生が全員履修する「北陸学院セミナーⅠ」、２年生全員が履修する「北陸学院セミナーⅡ」という授業科目としても位置づけられ、単位化されている。学生は週に2.5回以上、すなわち学期中に38回以上の出席を求められており、それが単位修得要件の一つとなっている。

欧米と異なり、日本社会のようにキリスト教的文化価値や理念の残滓さえも元々ないような場においては、大学礼拝出席を学生の自由な選択に委ねた場合、学生の礼拝出席は激減し、ほとんど出席が見られなくなるという実情があることは認識しておく必要がある。そうした状況を踏まえずに学生の自主性を重んじるという名目で礼拝を自由出席にすることは、本学としてはキリスト教学校としての学生への使命を果たせないことになると考えている。キリスト教をまったく知らず、聖書に触れたこともない入学生に、その機会を確保せず、礼拝出席を最初から学生の自由意志に委ねることは本学としては、キリスト教教育の責任放棄になると考えている。それゆえに、少なくとも１・２年生においては礼拝出席を必修単位化された授業科目として位置づけ、学期末に礼拝出席規定回数に満たなかった学生には不足回数に応じた補いの課題に取り組むことを単位認定の条件としている。３・４年生は、基本的に礼拝は自由出席とされているが、それは１・２年生で礼拝出席の機会が確保され、福音に触れ、聖書を読み、賛美を捧げ、キリスト教人間観を学ぶ経験が担保されていることを前提としている。

表１：2021年度後期集合礼拝曜日別対象学科

子ども教育学科・食物栄養学科　対面授業の週

月	子ども教育学科
火	食物栄養学科
水	子ども教育学科
木	食物栄養学科
金	「食物栄養１年・子ども教育２年」と「食物栄養２年・子ども教育１年」を交互に

社会学科・コミュニティ文化学科　対面授業の週

月	コミュニティ文化学科
火	社会学科２年
水	コミュニティ文化学科
木	社会学科１年
金	社会学科２年と社会学科１年を交互に

感染拡大状況が深刻であった2020年度前期の間は、Google Classroom を導入し、毎日の礼拝動画を配信し続けた。学生はこれを視聴し、自分が学んだこと、思い巡らしたことをひと言（40～60文字程度）で記した礼拝出席ミニレポートをオンラインで提出し、これをもって礼拝出席１回として数えられることとした。2020年度後期からは授業が学科別に対面授業と代替授業（オンラインで課題を配信し、学生が課題に取り組んだり、Google Meet によるオンライン授業やオンデマンドの講義映像配信を視聴したりすることで、学生が登学せずとも授業が実施できる形式）を交互に実施することで、学校に登学している学生数を在籍学生数の半分程度に調整する態勢が採られた。大学礼拝もこれに準じて表１に示したように、曜日別に学科と学年を指定し、礼拝堂での出席者数を調整し、その日の出席者が全員間隔を空けて着席できる仕組みにした。授業が一部対面で再開されたのであるから、同じく授業「北陸学院セミナー」の一環として位置づけられてもいる礼拝においても、部分的に対面での集合礼拝を実現するところから再開していくことが道理であると学内には説明をし、理解を得るように努めた。

４月27日からは毎日大学礼拝動画を Google Classroom を通じて１・２年生に配信することを始めた。授業が再開されるまでの期間は３・４年生にも YouTube 公式チャンネルから大学礼拝を配信した。大学に集うことがかなわず、学生たちがそれぞれの置かれた場で孤立しがちであったこの危機的期間に、毎日大学からのメッセージとして発信され、学校と学生一人ひとりとの間の架け橋の役割を果たしたのが大学礼拝の配信であった。

授業が部分的に再開されて、学生をキャンパスに迎えることができるようになってからは、学生宗教委員にも積極的にさまざまな役割を担ってもらうよう促してき

た。掲示する礼拝ポスターを毎日更新する作業、特別礼拝や毎週水曜日の礼拝司会、礼拝献金の祈り、花の日・収穫感謝の礼拝・献金の呼びかけとポスター準備、特別伝道礼拝の告知ボード作成、学内のキリスト教絵画展示作業、クリスマスツリー点灯式やクリスマス礼拝の司会・聖書朗読、キャンドル点火等を担ってくれたのは皆、学生宗教委員である。2021年度に入ってからは音楽担当教員の熱心な指導により10名を超える学生が定期的に礼拝奏楽の奉仕に加わってくれている。

さらに学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同開発したPROG（Progress Report on Generic Skills）を導入し、結果表に基づく解説会を通じて学生一人ひとりの強みと伸びしろを学生自身が確認・発見し、本学での学びと生活についてより明確な目的と指針が得られる機会としている。その内容を学科でも共有し、学生一人ひとりへのアドバイジー面談の中でも活用されていくことが願われている。このアセスメントテストに「キリスト教人間観」に係わる10の独自設問も追加してあり、今後どのような教育活動や指標が本学ディプロマ・ポリシーにも掲げられるキリスト教人間観の涵養と相関関係を持っているのか探りつつ、さらなるキリスト教教育の充実を目指したい。

（2）建学の精神に関する教育実践報告：礼拝時における奨励とミニレポートからみるキリスト教的人間観について

2020年度よりコロナ対策方式[11]になることによって、当初の不安をよそに、礼拝堂での礼拝出席者数に制限がかかり、学生も教職員も落ち着いて礼拝に参加することができ、奨励者が自分の行った奨励についてミニレポートの内容を確認することが可能になった。そこで、奨励者がこのミニレポートに寄せられたコメントを読み、次回にフィードバックすることによって学生の礼拝への姿勢についてその変化を立証することができるのではないかという仮説を立てた。

コロナ対策方式では、礼拝カードの代わりにミニレポートを提出する必要があるため、対面においても動画においても以前ほど礼拝指導に困ることがなくなった。個別に礼拝をするというのは、周囲の目を気にすることなく、聖書を通して一人で自分と向き合う機会を持つことによる精神的な変化があったのではないか。また、登学できない日が続き学修を始め学生生活全般に不安を抱える学生にとって、礼拝は少なからずキリスト教的人間観について肯定的に考える機会になったのではないか。これらの仮説を、ミニレポートの記載内容から立証していきたい。

礼拝奨励１　2020年度前期（３回シリーズ）「見よ、聞け、語れ」

日本古来の仏教には「見ざる（猿）、聞かざる（猿）、言わざる（猿）」という教えがあるが、聖書にはさまざまな場面で「見よ、聞け、語れ」という言葉が登場する。[12]

礼拝奨励２　2020年度後期（４回シリーズ）「聖書とことわざ」

日本のことわざには聖書由来の言葉が存在することは意外と知られていない。ことわざの本来の意味を考えるべく、該当箇所を読み聖書が何を語っているのかを考える。[13]

礼拝奨励３　2021年度前期（４回シリーズ）「聖書と動物」

動物園に勤めているある方から、「聖書には何種類の動物が出てきますか」という質問を受けた。彼は、「聖書にはすべての動物が出て来なくてはならないはずです。」と答えた。聖書に登場する動物を取り上げ、み言葉とどのように関わっているかを考える。[14]

回収された学生のミニレポートを読むと、学生の反応には４つのパターンがあることが分かった。

パターン①　奨励内容を全体的にまとめたもの(要約型)

「聖書は見ざる聞かざる言わざるという言葉の真逆だということを知った。」、「他者をきずつけることを神は願っておらず、１人ひとりに神に喜ばれる生き方をしなければならないと学んだ。」、「どんなときでも主のご計画を信じ、救いの道へと導かれているその途中で、私達の中に覚悟を育ててくれていることがわかった。」など、奨励内容を自分なりにまとめて記述している。これは他の授業などを通して、内容を簡潔に述べる学習習慣によるものと思われる。対面にせよ、動画配信にせよ、奨励内容を理解しようとする姿勢が見受けられる。

パターン②　内容を一つに絞って考察したもの(考察型)

「何事に対しても一方的な偏見、それによる行為は良くないものだと知っていながらも繰り返す。これは人の性のように思えるが、その見方の角度を少し変えるだけでも変わるのだろうと思った。」、「悪い状況を目の前にしたとき、目を背けるべきではないと思った。」など、奨励内容から一つの話題（トピック）を取り上げ、そのことを掘り下げて理解しようとしているものがあった。奨励内容すべてについて記述する義務はないため、これだけはと思うトピック、奨励者に共感する部分だけを取り上げていることがわかる。奨励者はさまざまな話題を盛りこもうとするが、受け手はその中から選んで聞こうとしていることが分かる。

パターン③　身近な例を挙げて意見を述べたもの（例示型）

「私は23日に亡くなった若き希望ある女子プロレスラーを思い浮かべた。その女性はSNSの誹謗中傷によって追い詰められたそうだ。言葉の暴力というのは、人のことを精神的に追い詰める恐ろしい武器だと改めて実感した。」、「私も小学生の時からからかわれたりすることがあったので、今回のメッセージがとても心に響いた。」、「今コロナウィルスによって偏見やありもしないことをネットに書き込む人がいる。」など、奨励内容を

自分自身の体験などに結びつけ、共感し、さらに深い理解へと記述しているものも見受けられた。高等学校まで夏期休暇などに課されていた読書感想文では、作品のあらすじを追うだけではなく、自らの体験を踏まえて感じたこと考えたことを書く手法がよく用いられる。奨励についても、自分と向き合い、奨励内容について自己の体験に基づき深く理解しようとする姿勢が見受けられる。

パターン④　自分の今後の課題を述べたもの（課題型）

「新型コロナウイルスが拡大している中で、感染した人のために一生懸命働いたり手助けをしていたりする人がいるのに、批判ばかりしている人もいるのは残念だと思った。自分も何かできることがないか探したい。」、「ダニエルはライオンの穴に入れられた時もいつも通りに祈り求めたことによって神に救われたので、私も困った時だけ祈るのではなく、日々の礼拝の時間を大切にしようと思った。」、「妬みを抱いていて苦しいときでも神様のご計画であってその先には光の道に導いてくれるということを信じてみようと思った。」など、奨励を聞く前と聞いた後での自己変容を「今後は○○したい。」という言葉で記述している。奨励を聞くことで、学生に新たな考えや意志が芽生えてくることがあるということが分かる。それが例え、言葉だけで実行が伴わない場合であったとしても、その時その瞬間には聖書に向き合い、自分もこうなりたいという気持ちが喚起されていることが重要である。

他にもいくつかのパターンを重複するなど、パターンに収まり切れない内容の記述もあった。思わず宗教主事に「奨励に否定的な内容はなかったか？」と聞いたほど、聖書のみ言葉に基づいた奨励を否定的に捉えず、自分と向き合いながら聞くという姿勢が多く見られた。無論、対面での礼拝に出席せず、動画配信を視聴しなかった学生もいる。しかし、礼拝そのものに参加しない学生が他の学生に礼拝そのものに対して負の印象を持たせることはなかったといってよい。ここに、奇しくもコロナ禍の中で取らざるを得なかった措置が個々の学生にとって、いずれのパターンもプラスに働いているということが分かる。

第３章　コロナ禍における中部学院大学の取り組みと今後の課題

１．建学の精神に関する教育実践報告：コロナ禍におけるチャペル活動の継続

中部学院におけるチャペルや講義における活動の成果については、高木他（2018）や別府他（2021）で報告してきた。中部学院において、前項で紹介された北陸学院のように明文化（北陸学院第３次中期事業計画）されていないが、新型コロナ禍においても当然のこととしてチャペルや講義を継続し、学生の感想文などをもとに、活動の評価を行ってきている。

コロナ禍の中、2020年度前期は殆どが遠隔授業となった関係で、宗教主事が中心となり放送礼拝をチャペルの代替として行った。聖書朗読と祈りが中心であり、コロナ禍を念頭に置き、聖句を選び祈祷が捧げられた。後期は、遠隔と対面講義になった関係で、感染対策をしつつ通常のチャペルに戻すこととなった。以前のように近隣の牧師、教職員がスピーチを担当し、殆どのスピーチにおいて、「コロナ」を意識して語られたことを感じ取ることができた。

ここでは、直接コロナに触れたものを『光の子として』[15]から紹介する。その内容は、①．コロナによって、日常生活ががらりと変わったことに触れ、その日常生活の大切さを訴え、このような苦難や悩みにあっても、一人一人が愛され大切にされている神の愛を語ったもの、②．コロナ禍の「恐れ」をキーワードとして、ともにいてくださる神からの「恐れるな」に耳を傾けようというもの、③．コロナ禍にあって、差別や排除という誘惑に陥らず、試練と受け止め、様々な困窮や苦難、悲しみにある人たちを覚え祈り、そのことが人と人とのつながりを回復するとのこと、④．コロナ禍にある虚無感にあって、貧しさと苦しみと絶望の中に一筋の光として来られたイエス、そのクリスマスの意味について語ったもの、⑤．コロナ禍の中で不寛容さが失われている今、「喜びなさい」、「広い心を持ちなさい」との呼びかけに応え、神の前に平安の中、前向きに生きること⑥．コロナ過で苦しんでいる世界の人たちに加えて、自然災害などで大きな被害を受け苦しんでいる人たちを覚え、祈り、支援しよう、⑦．困窮の中に起こった最初のクリスマス、その時苦労の中にあった羊飼いたちが赤ちゃんのイエスを訪ね、声をかけたことから、コロナの苦しみの中でも声をかけ、励まし温かいつながりを持ち続けよう[16]などであった。

これはコロナ禍にあって、どう生きるか、どう考えるかということであり、上記の６人のスピーチは、「神（キリスト）の前にどう生きるか」、「神（キリスト）による守り、支え」、「人と人とのつながりについて」、「社会の片隅に追いやられた人たちへの理解」に当てはまり、普段から語られていることが、新型コロナ禍でよりその意味が明確化されたといえる。

２．建学の精神に関する教育実践報告：カルトへの予防対策と死の教育

新型コロナ禍の状況をふまえ、取り組みに新たな観点を加えて進めてきた。それはカルトへの予防対策と死の教育である。従来から前短期大学宗教主事志村真ともにこの問題に取り組み、入信者の家族への支援や脱会者への支援や予防活動の実践を通して発信してきた（志村、1999・高木、2008など）。「本学では絶対に被害者を出さない」という思いのもと、様々な予防活動も行ってきた。新入生のオリエンテーションや年度当初のチャペルで触

れ、講義の中で詳細に伝えてきた経過がある。

現在、多くのカルト団体はコロナ禍にあって直接的な布教は避けてインターネット利用に移行しているとのことであるが、「不安を煽る」カルト団体が用いる常套手段からいうと、格好の勧誘の材料になる。カルト自体の中に、この社会や時代の悪いあり方や価値観が凝縮して見られるのである。求められているのは、自由な自立した人間を目指すことであり、コロナ禍で同調圧力、均一性の志向がたびたび問題になっているこの社会で、周りに合わせない生き方を追求することである。加えて多様性の尊重や様々な障がいのある人たちとともにあるインクルーシブ社会の実現を目指すことである。それらを否定する価値基準やあり方をカルト団体は有しているといってよい。逆にいうと、この社会のある面がカルト化しつつあり、それがコロナによって助長され、明らかになっているということかもしれない。

二つ目は死の教育である。コロナが感染し始めた頃、多くの人々は不安にかられ、専門家はそれぞれに発言し、パニックともいえる現象が生じた。これは科学を信奉し合理性を追求してきたこの近代、現代の社会において予期しえないことが生じたことによる。しかし、ワクチン接種や開発が進んでいるといわれている治療薬の効果、つまりは科学的合理性の追求でコロナはやがて「克服」されるのかもしれない。一方で新たなウイルスの出現や自然災害によって、再度の「不安」がこの世界を覆うことも十分予期できる。そこで克服するために様々な知恵が動員されるだろうが、すべての災厄を克服はできない。

死は不可避である。この不安、感染の正体は何であろうか。毎日報道される死者数の影響が大きく、有名人の死もそれに拍車をかけたこの不安の正体は、死への恐怖であるとも言える。コロナ禍において女性の自死が問題とされているが、近年減少しつつあるという自死者数も増加していることが調査報告で示されている。コロナによる死ばかりが強調され、その他の死はまるで忘れ去られたように映る。要するにこれまで避けていた死に対して、コロナ禍において「予期しないこと」が突然生じたがゆえ、恐れを伴い、触れざるを得なくなったということである。命の源であり、死をも支配される神のもとにある私たちは死をタブーとすることなく向き合うことが求められている。

このような命の尊厳を守り、死の教育をさらに重視する意味合いがあると考え、2021年度は、7月に学生対象の宗教講演会（映像を発信）を市内の臨済宗大禅寺住職根本一徹氏を講師として実施した。また9月には同じ講師による教職員の研修会を開催し、筆者も牧師として僧侶である講師と対談する形でキリスト教への理解も求めた。また中部学院では「死生学」[17]の授業があり、筆者はキリスト教教員の立場からその一部を担っている。このような取り組みと建学の精神は有機的につながっていると言え、効果検証を今後行っていきたい。

第4章　考察

本稿では、まず両校の学長・学院長の論考をもとに、建学の精神について立ち返る作業を行った。そこでは、両校とも女子教育と幼児教育・福祉を柱にしてきた歴史があるが、その根底に、建学の精神に基づく教育理想とキリスト教主義教育の基本的方向が示され続けているところに特徴があることがわかった。また、聖句を建学の精神として標榜しているが、そこに創立者の学校に対する思いが込められており、北陸学院において、日中・太平洋戦争下の困難な時代にも、礼拝が毎日守り続けられてきたことや、幾多の困難があっても学校経営を継続してきた中部学院の沿革にそれが表れている。そうした確固とした理念や理想が、この新型コロナ禍や予測不能なVUCA world と言われる現代にあっても、大学や短期大学を根幹から支えていく上で重要ではないかと考える。

楠本（2008）は、問われるのは総合的に人間をどう理解するかであり、キリスト教的人間理解がその基本であるという。そして、すべての人が神に創造され、愛され、救われるべき尊い人格であり、この確認に基づいてこそ、どんな人をも尊び、仕えることができるという理念に立つことが基本に据えられなければならないとする。また、片桐多恵子は、人間理解において、自分を謙虚にする Under Stand の姿勢が重要であるとした。平等性、多様性の尊重のためのインクルーシブ社会の実現における人間理解と自分に向き合う姿勢を育てることを4年間にわたる連携共同研究でも追究してきたが、歴史的経過も含め改めてキリスト主義教育を礎とする建学の精神の理念の重要性が再確認された。

この新型コロナ禍において、両校の宗教主事や奨励担当者から礼拝や奨励、講義や研修会における取り組みとその成果についての報告が行われた。北陸学院の報告では、奨励の中で得た学生の意見を集約した結果、「み言葉に基づいた奨励を否定的に捉えず、自分と向き合いながら聞くという姿勢」が得られたことの意義をあげた。また、「礼拝が本学のすべての教育研究活動の土台であり中核であるという基本理解が、本当に教育研究共同体の構成員ひとり一人の中で確信となっているのかが問われるし、その本質が現れ出ることになる」として、「学生たちがそれぞれの置かれた場で孤立しがちであったこの危機的期間に、毎日大学からのメッセージとして発信され、学校と学生一人ひとりとの間の架け橋の役割を果たしたのが大学礼拝の配信であった」という効果も示されている。中部学院の報告において、放送礼拝をチャペルの代替として行う中で、コロナ禍を念頭に置いた祈祷が捧げられたことが紹介された。また、この状況にあって、カルト団体からの誘惑や死への親和性が高まることを鑑みて、それに焦点をあてた取り組みが解説された。そこから教えられるのは、チャペルやキリスト教関係活動とともに教育活動等もが建学の精神の具現化の場であ

り、キリスト教関係のものにとどまらないということであった。

北陸学院では、PROG によりこうした活動の効果を検証する取り組みが紹介されているが、建学の精神とキリスト教教育をはじめ、大学全体との活動との有機的連携を図るために必要なシステムや教育力について、引き続き検証を進めていくことが求められる。

結びと今後の課題

本稿では、新型コロナ禍の様々な問題が露呈したこの時代にあって、建学の精神の歴史的経過と意義を振り返り、礼拝やキリスト教主義教育の意味を再考した。人間の力で相当なことが可能になるという価値観が崩れつつある現代において、改めて明確にされたのが「神の前の謙虚」ということであった。それとともに、多様性を尊重し、正義や愛を追求し、どのような人も神の前に大切な存在であることを実現する隣人愛に生きるための人間観を形成していくことが重要であることが再認識された。

非キリスト者の学生や教職員が多勢を占める中で、建学の精神が構成員の心にどう届いているかも課題である。今後建学の精神のさらなる具現化に関して、より丁寧な、前向きな動きをしていくことが課題である。

（付記） 本研究は、2020年、2021年度中部学院大学・中部学院大学短期大学部特別研究費の助成を受けた。本稿執筆にあたり、ご助言いただいた、特命教授・堅田明義先生、同主幹・桐山潤氏に感謝いたします。

なお、本稿は共同執筆であるが、序章と第４章は別府、中島、高木、第１章(1)楠本、(2)別府、第２章(1)矢澤、(2)中島、第３章 高木が主に担当した。

註

1）その典拠は従来、箴言1章7節とされてきた。しかし1985年の学院創立百周年記念事業の一環として『北陸学院百年史』（以下、『百年史』）を編纂する過程で、ヘッセル愛用の英語聖書を確認したところ、詩編111編10節に下線が引かれていたことから、以後、ここを北陸学院建学の精神とすることとなった。

2）「幼児を養育する婦人は世界を支配するという諺のある通り、国家にとって婦人の教育は男子同様に大切なものである」。これは、先だって石川県令の岩村高俊が告辞のなかで「女子がその美徳を失わぬよう学芸を学び、実業に役立つようになれ」と述べたことへの、ヘッセルの答辞である。地方政治の首長が持つ旧来の女性観を越えた強い意志が読み取れる。『北陸学院百年史』18.

3）メリー・ヘッセルは米国長老教会の派遣宣教師として1883年に金沢に到着、翌年、ヘッセル塾を始め、さらに金沢女学校を設立した。しかし激務と過酷な環境のため病を得、1891年には治療のために帰国、強い意志により一旦金沢に戻るが、病状悪化のため再度帰国、1894年に天に召された。全てを金沢女学校に捧げつくした41年間の生涯であった。

4）1884年にキリシタン禁制の高札が撤廃されてから間もない時期、北陸地方は仏教とりわけ浄土真宗が隆盛であり、キリスト教への偏見は根強かった。また閉鎖的な地域であり、世界へと視野を広げるには至らなかった。そのため、キリスト教人間観を直接、学則に盛り込むことはできなかったと考えられている。『百年史』15-16.

5）これは高等女学校令の文言をそのまま引いたものである。国家主義の台頭とキリスト教教育への警戒のなかでは、聖書の信仰を直接校則に盛り込むことはできなかったと考えられる。『百年史』137.

6）この年に日中戦争が始まり、太平洋戦争へと拡大する。キリスト教学校は敵性集団として警戒される。中澤校長は外国ミッションとの関係を整理し、北陸女学校を日本の財団法人とした。また愛国子女団を結成し、神社敬礼、御真影奉戴を行うなど、軍国主義と一定の妥協を行い、学校を守った。その一方でキリスト教教育を明示し、学校での礼拝を続けた。困難な時代にも、建学の精神を守るたたかいが行われていた。

7）北陸学院「学内報」第81号　2004年９月30日

8）第１次中期事業計画（2010～2014年度）は、学院全体の財政について収支均衡を目指した。その成果のもと、第２次中期事業計画（2015～2019年度）で、キャンパスの耐震化と、老朽化した建物の改築を実施した。さらに2020年度からの第３次中期事業計画では、学院のキリスト教教育の確立を目指している。毎年度の事業計画は中期事業計画に沿って建てられ、実行、振り返り、改定が行われる。

9）学生の学修成果を可視化するアセスメント・ポリシーについて、本学は指標の一つとして2020年度に、河合塾とリアセックが共同開発したPROGテストを導入した。これにより、学生の社会人基礎力とともに、本学が独自に設定した質問項目によりキリスト教人間観の理解度・習熟度も測り、その育成を図っている。

10）北陸学院スタンダードは2008年に、幼稚園から大学までの北陸学院のキリスト教継続教育の内容を定めたものである。聖書・キリスト教教育を基礎に、教科の分野ごとに各校での学びの内容をまとめた。2010年度以後の中期事業計画もまたこれを前提としている。2020年に策定されたMission Standard 2030はこれを、Education 2030を参考に継承・発展させたものであるが、2021年度の時点ではまだ、各学校段階における学びの内容にまで具体化されていない。

11）コロナ対策方式とは、2020年度から採用された礼拝で、密を避けるために対面で礼拝に参加する学生と当日礼拝動画を視聴する学生とに分けて実施する礼拝を指す。

12）詳細には次のような奨励を行った。
第１回「見よ」　ヨハネによる福音書　1章29-30節
第２回「聞け」　使徒言行録10章30-33節
第３回「語れ」　エフェソの信徒への手紙　６章17節～20節

13）詳細には次のような奨励を行った。
第１回「七転び八起き」　箴言24章16節
第２回「目から鱗」　使徒言行録９章18～19節
第３回「人はパンのみにて生くるにあらず」マタイによる福音書４章１～４節
第４回「狭き門より入れ」マタイによる福音書７章13節

14）詳細には次のような奨励を行った。
第１回「聖書と動物①　聖書とハト」創世記６章６～10節
第２回「聖書と動物②　聖書とさかな」ヨハネによる福音書21章４～６節
第３回「聖書と動物③　聖書とライオン」ダニエル書６章７～12節
第４回「聖書と動物④　聖書とハチ」詩編19編８～11節

15）中部学院大学・同大学短期大学部宗教委員会　光の子として　チャペル奨励集Ⅻ　2020

16）①～⑦はそれぞれ岩井謙太郎氏・益田明氏・日高伴子氏・山田修平氏・沖野毅氏・志村真氏、西島真理子氏によるものである。

17）片桐史恵氏中心に非常勤を含む４人の教員が担当している。

文献

別府悦子・中島賢介・高木総平・大井佳子・矢澤励太・ダーリンプル規子、建学の精神に関する大学間連携による共同実践研究〈第二報〉－インクルージョンと多様性を尊重する人材育成に向けて－、中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要第22号、21－33．2021.

別府悦子・大井佳子・水野友有・谷昌代・ダーリンプル規子・平野華織・山田丈美・齋藤英俊・西垣吉之，統合保育からインクルーシブ保育への展開のための実践的視点―エピソードをもとにした大学間連携共同研究（1）－，中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要，第21号，1－12，2020.

ダーリンプル規子・中島賢介・大井佳子・谷昌代・志村真・別府悦子、インクルーシブ保育・教育をキリスト教保育・教育の視点から考える－大学間連携共同研究(3)－、中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要21、23-31．2020.

平野華織・谷昌代・大井佳子・別府悦子・水野友有・ダーリンブル規子・西垣吉之、インクルーシブ保育・教育を担う加配保育者のあり方－大学間連携共同研究(2)－．中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要21、13-21．2020.

片桐孝、十日物語、日本基督教団華陽教会機関誌葡萄の枝第15号、1966.

窪田暁子、愛深き道－片桐孝先生追悼文集、学校法人岐阜済美学院、277－280．2002.

楠本史郎、建学の精神に立ち返り、将来を切り開く、私学経営№401、4-11．2008

中島賢介、キリスト教大学における建学の精神に関する研究．北陸学院大学北陸学院大学短期大学部研究紀要．1-8．2020.

志村真、カルトで傷ついたあなたへ　いのちのことば社、1999.

高木総平・志村真・楠本史郎、「建学の精神」に関する大学間連携による共同実践研究（第一報）－その具現化としてのチャペル活動－、教育実践研究第4巻、143-151．2018.

高木総平、現代のエスプリ490、カルト－心理臨床の視点から．2008.

和木康光、神と人とを愛して　岐阜済美学院物語、2000.

Collaborative Research on the "Founding Spirit" through Cooperation among Universities (3rd Report)
― A Christian Perspective on Humanity in the Era of the Covid-19 Disaster and Beyond ―

Etsuko BEPPU, Kensuke NAKAJIMA, Sohei TAKAKI,
Reita YAZAWA, and Shiro KUSUMOTO

Abstract：This study is part of a collaborative study, which has been continued, in terms of a cooperation agreement concluded between Hokuriku Gakuin University and College and Chubu Gakuin University and College. In this study, we reflected on the historical processes and positioning of the "Founding Spirit" in both Universities. Then we examined chapel activities and educational practices based on the Christian view of humanity, taking into account the impact and reality of Covid-19. In conclusion, it was suggested that there is a history of the "Founding Spirit" that has supported both Universities and Colleges. The underpinning of that spirit is the Christian view of humility before God in respecting and understanding each individual as an irreplaceable being. We believe that the realization and development of that view is increasingly necessary.

Keywords：Covid-19 Pandemic, Founding spirit, Christian education, Christian Perspective on Humanity